

「冗長性」の循環

稲賀繁美

ついさっきまで、「日本語が論理的じゃないなんてことはない」と力説する Yankee 娘の言に賛成の意思表示を惜しまなかったその舌の端が乾かぬうちから、「この種の日本語にはおよそ構文的論理なぞ存在しないから、せいぜい全体の雰囲気をつかむ様にされた方がよからう(これをしも「了解」——(verstehen) と言うのだろうか?)」などという忠告をフランス人の中年男相手に、さも悟ったように説いて聞かせている自分にふと気付いてなるほどこれでは日本語が論理性に乏しいと言われるのも、無理からぬことだわい、と人知れず慨嘆してみたこともある。もとを正せばかく言う私自身に何の定見もないことを暴露して見せているにすぎないのではあるけれども。

何の因果か定かではないが、エコール・ノルマル出の

秀才がよりによってフランス科の落ちこぼれに家庭教師を頼むというが如き椿事が、この世の中には時として発生するものらしい。片や御年若冠十三の砌より既にして、数学とラテン語の教師の重責をみごと全うしていたという古参、対するに落ちこぼれこと小生、其の肩書に安住してはまだモラトリアムを決めこんでいる二十四歳の、最近つくづく古いを身にしみて感じている、とっちゃん坊や。どちらがシテナのかワキなのかも定かならぬ、この格好の好対照から、もとより蛇足の狂言が演ぜられることとはなるのである。

われらが日本語講座の本日の教材は、いわば一般向き禅問答であった。曹洞宗は本山永平寺のナントカというそれはエライ坊様のありがたい講話なのである。ところがこれが有数の日本語使いたる我が生徒にとつてすら、およそ典型的な禅文答が一般人に呈し得る限りのナンセンスぶりを発揮してくれることとなる。わが愛すべき雇主の第一声は、という、

なに言ってるのこの爺い、全然わからないよ。(原日本語)

坊主憎けりや袈裟まで憎い、ならぬ、話わからぬくやしさゆえに、話し手までも憎くなる、というところだろ

定式は畢竟同一言語内ではか妥当しないのである(あたり前かしら?)

このあたりのことをうまく理論化できれば日本記号学会賞受賞も夢ではないと思うのだが惜しむらくは著者にはそれだけの強靱な思考力が備わっていない。ただ小生は外人にとって冗長性の高いことが決して理解の助けとはならぬ、という素朴な事実を発見して喜んでいゝにすぎない。もっともこうした事態は必ずしも全ての言語についてあてはまるわけではなく、むしろ、構文をあいまいにしてまで冗長性を高め得るような特性がたまたま日本語には豊かに備わっているからこそ、日本語を理解しようとするフランス人に、情報理論上ではあり得ないはずの事態が到来したのだ、と小生のちっぽけな頭脳は憶測している。

何の話をしているのか皆目わからぬという諸兄のために若干の具体的説明を、半ば無駄とは悟りつつも、試みる。日本語の口語を記号学的に分析したらおもしろからう、という示唆をするためである。件の○○禅師の場合もその典型なのであるが、口語日本語は構文として完結することのないまま、徐々に方向を転じた一連のエッセ文がドラドラと連続する。連続すると言っても、構文が

うか。いやアそのお気持ちよくわかります。ええ本当、心からお察し申し上げます。何の話か皆目見当がつかぬという読者には、永平寺発行のこの種のカセットテープの同時通訳を試みられんことを、心より申し述べたく存じ上げます。まあ典型的な日本語の口語がいかにヨコダオンになりにくいことか。建設が破壊より容易だ、というこの稀有な現象こそ、我が翻訳天国に象徴的な文化現象なのではありませんまいか。そしてこの逆説こそ日本翻訳文化を支えている虚構なのです。閑説休憩。

かの簡明、端正にして少々恐ろしいまでに明晰なフランス語をしゃべる、元日仏学院館長の口から出たとは、端で耳にしつつもにわかには信じられなかった、この卑俗な反応を彼に惹き起こさしめたのは果して何であったか。それは私見によれば、およそ情報理論(ないし記号学)の根本定理に反する日本語の特性なのである。つまり、日本語においては、冗長性の高さは、外国人にとつての日本語理解の容易さに反比例する。およそ外国人の日本語理解に関する限り、例のシャノンの冗長性の定式は全く妥当しないのではあるまいか。そして先まわりして言えば、ここにおいて必然的に、翻訳の問題と、文化負荷の問題とが複雑にからまりあってくる。シャノンの

完結せず次の分節化を開始する結果、前のエッセ文章は宙ぶらりんのまま放置されることとなる。これは外国人にとつてははなはだやっかいである。しかし日本人にとつては、かえって中途で立ち消えになってしまった、中絶させられた文章——つまり、それ自体は話し言葉の中で分節化されることはなかったものの、既に分節化されたエッセ文章によって暗に合意されたもの——がぼんやりと念頭に浮かんできて、一種の予感としての場を形成するがゆえに、こうしたそれ自体ははなはだ曖昧な「冗長さ」のお陰で、あらかじめ、次に話題がどの方向に「なんとなく」ズレ込んで行くかが察知できる。こうした暗黙のノエーシスのコードが奇妙に発達しているのが日本語(を常用する特殊人種)の特性と言うことは可能であろう。未完結の文章が連続と金魚のフンの如くにつむぎ出される事態そのものに冗長性を認め得るとすれば、——というのもそもそも冗長性の概念がトートロジーないしウロポロスの構造と無縁でない限りにおいて、日本語特有のこうしたエッセ文章間の「甘え」的(?)相互依存関係も決して冗長性の概念に反するものではあり得ない——我々の反省は必然的に、いわゆる「冗長性」概念そのものに内在するある撞着に触れずには居まい。というのも、

我々の文脈に沿って考えれば、そもそも冗長性が「理解」に益する、という学識自体が、実は一種の解釈学的循環を逆手にとった居直りに他ならないことは明らかだからである。

こむずかしいことを並べるのはこれ位にしよう。モリス・パンゲ氏の日本語教師をおおせつかって二ヶ月。その間の給料三万五千円也。その大半は雇主の意に反して飲み代となり、むなしく潰え去っている。氏がより良き、というか少しはマシな日本語教師を見いだして、そちらに鞍替えする日は遠くない。そしてそのより良き日本語教師は、必ずや循環論法の日本語を自ら超克し、「論理的」な日本語を語れるご仁であるに相違ない。だけど君、君はゲーデルの不完全性定理を忘れていませんか。